



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「はず」の上接語「う」について：近世・近代期を中心に
Author(s)	菅, 由美子
Citation	国語国文研究, 132, 58(1)-45(14)
Issue Date	2007-05-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93370
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_132-58-45.pdf



「はず」の上接語「う」について

——近世・近代期を中心に——

菅 由美子

キーワード：モダリティ、「はず」、上接語、助動詞「う」、助動詞「だろう」

1. はじめに

近世期、1600年代半ばにモダリティ形式としての用法を確立した「はず」は、近代語の形成・確立期¹である近代期（明治・大正期）に、現代語「はず」へとさらに歩みを進める。近世期にモダリティ形式としての用法を確立する「はず」については、すでに佐田（1974）、劉（2000）、山口（2002）の研究がある。菅（2004）は、それらの先行研究を承け、調査資料を拡大して、近世期における「はず」のモダリティ化の過程を通時的に考察し、さらに、モダリティ形式としての用法が確立したあとの「はず」について、近世期末まで調査を進め、もともと口語的表現であった「はず」の用法上の制約が弱まり、公的な文章に現れるようになるまでの様相を記述した。

そして、本稿では、近代期の調査結果を新たに加え、「はず」に上接する助動詞「う」²を取り上げ、「はず」との関連を論じる。なぜなら、菅（2004）で指摘したように、近世期には「はずがない」には助動詞「う」が上接する例が多いが、現代語ではこの形式は一般的ではなく、その用法の変化の理由が問題となるからである。そして最後に、今後への課題として、現代語における、「はず」に上接する助動詞「だろう」の出現という現象についても簡単に触れる。

「はず」に関するこれまでの研究は、近世期におけるモダリティ化の過程を論じるものの、現代語「はず」の意味用法に関する考察、ほぼこの2つに限られていた。本稿はこれまで欠けていた近代期の「はず」の様相を記述したものとして意義がある。

また、「はず」の上接部分という限られた範囲ではあるが、本稿における助動詞「う」の考察は、古代語助動詞「む」から近現代語助動詞「う」への変遷過程において大幅に縮小した、助動詞「う」の連体法に関する新たな資料を提供するものである。

以下の論では、「はず」に上接する語を上接語、「はず」に上接する助動詞「う」「だろう」を、上接語「う」「だろう」と呼ぶ。

2 時期区分と資料

2.1 時期区分

菅 (2004) は、「はず」のモダリティ化の過程を詳細に観察するために、近世期を次のように区分した。本稿は、その区分を引き継いでいる。

〈近世期区分〉

第1期 慶長5 (1600) 年から寛永6 (1629) 年まで [29 年間]

第2期 寛永7 (1630) 年から元禄期 (1688-1703) まで [73 年間]

第3期 元禄期以後・宝永元 (1704) 年から寛政14 (1800) 年まで [96 年間]

第4期 享和元 (1801) 年から幕末 (1867) 年まで [66 年間]

近世第1期は活用語を上接する「はず」が現れるまでの時期であるため、今回は取り扱わない。また、近代期は、その変遷を詳細にみるために、次のように細かに区分した。

〈近代期区分〉

第1期 明治前期 (明治元年から明治19年まで) (1868-1887) [19 年間]

第2期 明治後期 (明治20年代から明治44年まで) (1888-1911) [25 年間]

第3期 大正期 (大正元年から大正15年まで) (1912-1926) [15 年間]

2.2 調査資料

近世期の調査は、『日本古典文学大系』(岩波書店)、『日本思想大系』(岩波書店)を中心とし、さらに、『断本大系』(東京堂出版)、『洒落本大成』(中央公論社)、各種索引資料、岩波文庫などを補い、できるだけ広い分野の資料に目を通した。また、近代期については、『日本近代文学大系』(角川書店)と雑誌『太陽』(『太陽コーパス』による)の2資料を中心に、その他、福沢諭吉の著作等で補った。また、用例数の少ない近代第1期については『明治文学全集』(筑摩書房)の調査も行った。

3. 上接語「う」

3.1 上接語「う」についての要点

「はず」について、近世期(第2期～第4期)1024例、近代期2545例の用例を調査し、検討を加えた結果、次の3点が認められた。

- ① 上接語「う」は、「はず」形式のうち、「はずがない」にほぼ専用の上接語である。
- ② 上接語「う」は近世期から近代期末にかけて出現率がゆるやかに下降してい

る。

③ 上接語「う」が下接する述部は近代期に入ると、意志性のないものに偏る。

以下、この3点を詳論する。

3.2 「う」が上接する「はず」形式

上接語と「はず」の承接を詳しくみるために、まず「はず」を、「実質用法」（「はずをあわせる」「はずをとる」など）、「はずがある」「はずがない」「はずだ」「はずではない」「はずの」の6形式に分類する。次の〈表1〉〈表2〉は「う」が上接する「はず」形式を示したものである。

〈表1〉近世期：上接語「う」+「はず」形式 [] 内は「はずがない」総用例数

	近世2	近世3	近世4	計
「う」+はずがある	0	0	0	0
「う」+はずがない	6[14]	18[45]	5[19]	29[78]
「う」+はずだ	1	2	0	3
「う」+はずの	0	1	0	1
計	7	21	5	33
「はず」総用例数	195	633	196	1024

〈表2〉近代期：上接語「う」+「はず」形式 [] 内は「はずがない」総用例数

	近代1	近代2	近代3	計
「う」+はずがある	0	0	1	1
「う」+はずがない	13[42]	69[251]	62[312]	144[605]
「う」+はずだ	0	0	1	1
「う」+はずの	0	0	0	0
計	13	69	64	146
「はず」総用例数	213	1227	1105	2545

〈表2〉の「う」146例には「ん」が3例含まれている。「はず」はもともと口語的な表現で（菅（2004：189））、文語体では用いられず、近世期には助動詞「む」が上接する例はないが、次の1）2）および後掲7）の3例が「ん」となっている。この3例は、「はず」が口語的であるという意識がなくなった時期に、助動詞「う」を助動詞「む」に置き換えることにより出現した表現であろう。

- 1）落合直文中島幹事二氏の主唱せる日本文章専修會は主として後進を誘掖するに在るが如し、また時文の諸家は多くは新聞雑誌に政論の筆を執れるもの、

固より文會などあらん筈なし、 「明治の文学界」『太陽』（1895）

- 2) ど、ど、どんな事とて、た、た、大した事ではない。お前も知る通り、字は書けず。ち、ち、力術は出来ず。算盤ばかり少し弾けうとも、役に立たん筈もなし。と、と、ともかく、大原さまの、ご、御周旋にて、明日から見張番に之くのぢや。 「銀釵」『太陽』（1895）

さて、〈表1〉によると、近世期の「う+はず」全33例中29例、つまり88%が「はずがない」であることがわかる。また、〈表2〉によると、近代期の「う+はず」全146例中144例、99%が「はずがない」であることがわかる。以上から、上接語「う」は、「はずだ」「はずがない」「はずの」などの「はず」形式のうち、「はずがない」に偏って上接していることが明らかである。

近世・近代期を通して、「はず」形式のなかで用例数が多いのは「はずだ」「はずがない」「はずの」の3つである。「はずだ」は「はず」形式のなかで最も数が多く、近世期には「はず」1024例中777例が、近代期には「はず」2545例中1644例が「はずだ」である。また、「はずの」は近世期に101例、近代期に203例がある。しかし、〈表1〉〈表2〉には「う+はずだ」4例、「う+はずの」1例ときわめて少数しか現れていない。この4例に、「う+はずがある」1例を加えた6例が、今回の調査で判明した、「はずがない」以外の形式に上接する「う」の全例である。次に6例をあげる。

- 3) いやそなたは連歌の頭にさへ当れば腹を立る。誠に此様なむぐらのやどへ。各の御出なさるゝを忝ないと思ふて。いぶせきこやのちりをもはらふて。よろこばふはづを。其ごとくにお機嫌にするは。定而某に連歌をやめよといふことそふな。 「箕潜」『続狂言記』（1700）
- 4) 心をぞわりなき物と思ひぬる見るものからや恋しかるべき ふかやぶ
心ト云モノハ ムリナ事ヲ思フ物ヂヤトサ思ハレル カウシテ逢テ居ナガラモヤツハリ 恋シワイ 逢テ居ナガラ恋シカラウハズカイ 逢テ居テハ恋シカラウハズハナイニ
- 5) 唐衣なれば身にこそまつはれめかけてのみやはこひむと思ひし かげのりのおほきみ
キルモノハ着ナレ、バヤハラカニナツテ 身ニヒツタリトツキマツハレル物ナレバ ソノ通りニ 人モ ナレタナラバ身ニシタシウゴソナラウハズナレソレニ馴テカラモヤツハリ此ヤウニヨソヨソシウテ ジヤウヂウ心ニカケテ恋シウ思フテバツカリ居ヤウ事トハ思ウタ事カイ ナレテカラモヤツハリ此ヤウニアラウトハ思ハナンド 4) 5) 『古今集遠鏡』（1793）
- 6) 只此団ノ効ト云ハ、斯有フ筈ノコト、兼テ覚悟ノ前、珍シウ奇特ト誉ルコトデハナイ。掲タレバ灼ナツタ、堤切タレバ水ガ流レタチ謂フヤウナ物、サテモ気味ヨク流レタトハ言ヌゾ。 『網齋先生敬齋箴講義』（?1711）³
- 7) 人民は前大統領を歓迎したり、又皇帝も其後謁見を許したまはざりければ、

- 和蘭よりの歸途再び之を請はん**筈**なりといふ 「各国近事」『太陽』(1901)
- 8) それなのに國民として、將又社會の一員としての利害や、自信の**あらう筈があらうか**。
「日本の貴婦人は何を為しつゝありや」『太陽』(1917)

7) 「請はん」は否定表現「請はぬ」である可能性もあるが、本稿は「請はむ」であると判断した。6例のうち、4)「恋シカラウハズカイ」、8)「あらう筈があらうか」の2例は反語表現であり、意味上は「う+はずがない」と同等のものである。この2例を含めても、「う」が「はずがない」以外の形式に上接している例は179例中6例とわけて少なく、「う」は「はずがない」にほぼ専用の上接語といえることができる。

3.3 「はずがない」の上接語

ところで、「はずがない」の上接語は「う」に限られるものではない。一般の用言が直ちに上接する言い方もある(山口(2002:126))。次の〈表3〉は「はずがない」の上接語のうち使用頻度の高い上位2種「動詞肯定形・非過去」「う」および「その他」の使用数をまとめたものである。

〈表3〉近世・近代期:「はずがない」上接語

	近世2	近世3	近世4	近代1	近代2	近代3	計
V・肯・非過去*	7	20	8	18	97	164	314
「う」	6	18	5	13	69	62	173
その他	1	7	6	11	85	86	196
計	14	45	19	42	251	312	683
「はず」総用例数	195	633	196	213	1227	1105	3569

*「Vられる」「Vさせる」を含む。

近世・近代期を通して、「はずがない」の上接語のうち、用例数の多い上位2種は「動詞肯定形・非過去」と「う」で変わらず、両者を合わせると「はずがない」の上接語全体の7割を超える。

次の9)～14)は、近世第2期から近代第3期までの、a)「う」が上接する、b)「動詞肯定形・非過去」が上接する、「はずがない」の例である。

近世第2期

- 9) a 殺生をする道具をば、此尊い愚僧が持たふは**づはない**。(山口(14))
「鹿狩り」『狂言記正篇』(1660)
- b 千七百貫目の銀は、一代の始末にて舒しければ、一門ほしがればとて、
沢山にやる筈もなし。 『日本永代蔵』(1688)

近世第3期

- 10) a 権三体が茶の湯で伝授許し受けう**筈**もござらねども。師匠の咄聞きは

つった儀も有り。大概非の入らぬ程の御用の間には合せませうと。

- b これ遣らぬ。三方は高塀北は茨垣。犬猫も潜らぬに人の来る筈がない。

10 ab) 『鍵の権三重帷子』(1717)

近世第4期

- 11) a たゞしおまへがたも幽れいじやアねへか。どふも人間なら、爰迄いきてこよふはづがない 『東海道中膝栗毛・五編』(1806)
b コリヤ、どうじやい。最前ひやして置た下帯がないはい。まだ洗はん物が失る筈はないがの。 『浮世風呂・前編男湯之巻四編』(1809)

近代第1期

- 12) a 気の毒ながらお返しして仰しやる所に聊も御無理な事ありませんから金さへあれバこんな事をお頼み申さう筈もなければ何を言ふにも今度の災難実にない袖ハ振せんから
b お前に金さんが東京で約束もあつたさうだが今となつてハ皆反故ゆゑ縁もゆかりもない人から金を貰ふ筈がなければ五円ハ此戻します

12 ab) 『金之助の話説』(1878)

近代第2期

- 13) a 此方の心持ちに感興、趣味、用意のない限りは、如何に血眼で探してもその美に接し得られよう筈はなく、而かもその作物は畢竟職人の拵へた細工物と選ぶ所のないものたることは當然である。
「日本現時の彫刻界」『太陽』(1909)
b 心なき群集にても決してそんな浅薄極まる素行の怪むべき主義者は永く同情しました永く倚信する筈はない、爲政者は宜しくそんなものを度外視して然るべしである。 「政治と近代思想」『太陽』(1909)

近代第3期

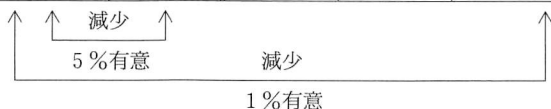
- 14) a 夫から若い男だらうか年輩の人だらうかと思案してみるのです。坐つてゐてそんな事の知れやう筈がありません。さうかと云つて、起つて行つて障子を開けて見る訳には猶いきません。
b そんな鋳型に入れたやうな悪人は世の中にある筈がありませんよ。平生はみんな善人なんです。 14 ab) 『ころ』(1914)

3.4 上接語「う」の減少

近代期における、上接語「う」の1つめの変化は、その出現率の減少である。次の<表4>は「はずがない」総用例数と上接語「う」の例数、「はずがない」総用例数に対する上接語「う」の出現率を示したものである。

〈表 4〉「はずがない」総用例数と上接語「う」

	近世期	近代期	近代 1	近代 2	近代 3
はずがない	78	605	42	251	312
「う」+はずがない	29	144	13	69	62
「う」の出現率	0.3718	0.2380	0.3095	0.2749	0.1987



上接語「う」の出現率は、近世期から近代期末にかけてゆるやかに下降していく。

〈表 3〉をもとに独立性の検定を行ったところ、次の結果が得られた。

- i 近世期と近代期との比較では 5%有意である。
- ii 近世期と近代第 3 期との比較では 1%有意である。

3.5 上接語「う」が下接する述部の性質の変化

出現率の下降とともに、近世期から近代期にかけて上接語「う」に現れたもう 1 つの変化は、「う」が下接する述部の性質に認められる。上接語「う」が下接する述部は、近世期には、意志性の有無による偏りはないが、近代期に入ると、意志性の認められないものに偏ってくる。以下、意志性の認められない述部を「意志性・無」、意志性の認められる述部を「意志性・有」と呼ぶ。

次に、近世第 2 期から近代第 3 期まで、各期 1 例以上、a) 「意志性・無」、b) 「意志性・有」の例をあげる。近世第 4 期、近代第 3 期には「意志性・有」の例がないため、17 b) 20 b) がなく、17 a) 20 a) のみとなっている。

近世第 2 期

- 15) a 此文がをもらふ**はずはない**。ふしぎなことじや。
「になひ文」『続狂言記』(1700)
- b 主が俺に渡した銀を、そちにやらふ**筈がない**。
『傾城壬生大念仏』(1702)

近世第 3 期

- 16) a 寝てばかり居やう**筈もなきゆへ**起もし、咄してばかり居やう**筈もなきゆへ**に、つとめも致させますれども、規矩にもかゝりはしませぬ。
『盤珪仏智弘濟禪師御示聞書上』(1757)
- b おさんも色を直し。たとへ私が仏でも男が茶屋者請出す。其の鼻屑せう**筈がない**。是ばかりはちのちに微塵も嘘はない母さま。証拠に私が立ちますと。
『心中天の網島』(1720)

近世第4期

- 17) a 鏡と相談して見るがよからふと云れては客にはまらふ筈はない客とても
又同じ事 『客野穴』(1840)

近代第1期

- 18) a 大事な得意の機嫌をそこねるハ必定と彼は工夫に心を摧きしが元よりない知恵の出やう筈もなければ唯鬱々と憂ぐのみ
『沢村田之助曙草紙・初編』(1880)
- b 御鼻負になる旦那方に如何様な事が有ませうとわたしの口から何処へなと洩さふ筈ハござりませねバ其お氣遣ひハ必ず御無用
『蝶鳥紫山裙模様』(1884)

近代第2期

- 19) a 何も解つて貰はうとは言やしない。同情が無いと言つたんだ。男の事業が解る位なら、そんな挨拶の出来やう筈もない。 『旧主人』(1902)
- b 腕車の破れたのも、車夫に間違へられたのも、来よう筈のない、芳原近くへ来る約束になつて居たのかも知れないと、くだらないことだが、悚としたんだね。 『註文帳』(1901)

近代第3期

- 20) a この様な堅實な國民性をもつて居る我國の民衆が、度を超えた非常な危険を犯すことの、あり得よう筈がない。
『民心動揺の時代』『太陽』(1925)

次の〈表5〉〈表6〉は、それぞれ近世期と近代期の上接語「う」が下接する、「意志性・無」、「意志性・有」の用例数と、全体に対する「意志性・無」の出現率を示したものである。

〈表5〉近世期：「う」が下接する述部「意志性・無」「意志性・有」

	近世2	近世3	近世4	計
「意志性・無」	3	14	5	22
「意志性・有」	3	4	0	7
計	6	18	5	29
「意志性・無」の出現率	0.5	0.7777	1	0.7586

〈表 6〉 近代期：「う」が下接する述部「意志性・無」「意志性・有」

	近代 1	近代 2	近代 3	計
「意志性・無」	10	68	62	149
「意志性・有」	3	1	0	4
計	13	69	62	153
「意志性・無」の出現率	0.7692	0.9855	1	0.9722

用例数の違いもあり、〈表 5〉〈表 6〉では、「意志性・無」の出現率が近世期から近代期へ次第に増加していく様子を確認することはできない。しかし、「意志性・無」の出現率は近世期から近代期にかけて明らかに変化している。〈表 5〉〈表 6〉をもとに独立性の検定を行ったところ、近世期と近代期の間には、次の〈表 7〉と i、ii、iii、iv に示す結果が得られた。

〈表 7-1〉 近世期・近代期：「う」が下接する述部「意志性・無」「意志性・有」

	近世期	近代期
「意志性・無」	22	140
「意志性・有」	7	4
計	29	144
「意志性・無」の出現率	0.7586	0.9722

↑ 増加 ↑
1%有意

〈表 7-2〉 近世期・近代期：「う」が下接する述部「意志性・無」「意志性・有」

	近世期	近代 1	近代 2	近代 3	近代期
「意志性・無」	22	10	68	62	140
「意志性・有」	7	3	1	0	4
計	29	13	69	62	144
「意志性・無」の出現率	0.7586	0.7692	0.9855	1	0.9722

↑ ↑ ↑ ↑ ↑
増加 1%有意 増加
1%有意 1%有意

- i 近世期と近代期との比較では 1%有意である。
- ii 近代第 1 期と近代第 2 期との比較では 1%有意である。

iii 近世期と近代第2期との比較では1%有意である。

iv 近世期+近代第1期と近代第2期との比較では1%有意である。

検定結果 i、ii、iii、iv と〈表6〉に示した出現率をみると、上接語「う」が下接する述部の変化は、近代第1期と近代第2期の間に起こっているようにみえる。しかし、近代第1期は「はず」総用例数が213例（〈表2〉）と少ないため、今後さらに調査を続け、慎重に判断する必要がある。

4. まとめ——近世・近代期の上接語「う」——

さて、ここまで確認してきた上接語「う」に関する現象にはどのような理由があるのだろうか。

① 上接語「う」は、「はず」形式のうち、「はずがない」にほぼ専用の上接語である。

①は、事態の現実性を否定することを示す「はずがない」と、事態が現実のものではないことを示す「う」が結びついたものとして説明できる。話し手が「はずがない」と判断する事態は、「う」がつくことによって、その現実否定性がより明確になる。上接語「う」をこのようにとらえることについては、すでに、以下に述べる先行の論があるが、本稿は、近世・近代期の包括的な用例調査に基づき、これを確認したものである。

城田（1977：43）は、「はずがない」に上接する「う」は、「その内容である事柄が現実的存在でないことを強調する、ないし、予告する意味（である）」と述べている。また、尾上（1999：100-101）は、助動詞「む」「う」を用いて述べられた文の事態認識のスキーマは、「非現実事態仮構」ないし「設想」であるとし、助動詞「む」「う」は、事態が現実のものではないことを示すマーカーとして用いられることを述べている。さらに、山口（2002：126）の、「『はず』に上接する連体修飾語は、その文において現実性が否定されることになるから、話し手がその点に思いを致せば、おのずから例（14）（9a）。引用者注）のようにその連体句自体が推量の助動詞を伴いがちになるのであろう」という記述もまた、上接語「う」に事態が現実ではないことを示す働きがあることを指摘しているものと考えられ、本稿に示したデータはこれを支持するものである。

連体法「う」の意味・機能については、吉田（1971：150）のように、終止法「う」のもつ「推量」の意味との関わりを論じるものもあるが、「う+はずがない」については、その結びつきが「推量」という意味によるのではないことは、助動詞「だろう」が「はずがない」に上接して用いられないことがないことから明らかである。「だろう」と「はず」形式の承接についてはさらに後述する。

② 上接語「う」は近世期から近代期末にかけて出現率がゆるやかに下降している。

「はずがない」の用例における、上接語「う」の出現率の下降は、助動詞「う」の連体法が減少した結果、起こったものである。古代語助動詞「む」から近現代語助動詞「う」への大きな変化の1つは、助動詞「む」にはあった連体法が助動詞「う」では大きく減少したことである（堀田（1969：156）、山口（1991：35））。現代語では、「う」連体法に現れる名詞は、「はず」「もの」「こと」などの形式名詞にほぼ限られており、「う＋はずがない」は助動詞「う」の数少ない連体法の1つとして生き残っている。つまり、「はずがない」に対する、上接語「う」の出現率の減少は、一方では、助動詞「う」連体法における、「う＋はずがない」の出現率の増加という側面をもっているのである。

③ 上接語「う」が下接する述部は近代期に入ると、意志性のないものに偏る。

上接語「う」が下接する述部が意志性のないものに偏ってきたのは、「意志性のある述部＋う」に対して、推量ではなく、意志の解釈が優先するようになったためである。「私が食べようはずがない」での「私が食べよう」は、意志表現として解釈されるわけではない。しかし、「私が食べよう」というまとまりが、「時間があろう」「明日は寒かろう」などと比べて、意志の解釈を連想させやすいものであることは明らかである。それゆえ、「はずがない」に上接する「う」は、意志性のない述部、なかでも「ある」類⁴を選びがちになるのだと思われる。

堀田（1969：156）、城田（1977：41）が、現代語において、助動詞「う」が終止法で推量を表わす場合、「う」が下接する語には制限があり、主に意志性のない語が用いられることを述べているように、上接語「う」が下接する述部の偏りも、助動詞「う」の終止法における制限と同じ理由で起こったものである。

5. さらに検討を要する課題——現代語の状況——

最後に、現代語における助動詞「だろう」と「はず」の承接について簡単に述べる。

助動詞「う」「だろう」はどちらも古代語助動詞「む」に起源があり、近世・近代期に意味用法が確立し、さらに終止法で推量を表すことができるという共通点がある。「はず」の上接語は現代へ向かい、さらに変化しており、なかでも「だろう＋はず」の出現は、前節で検討した要点①と深い関わりがある。

ここまでみてきたように、近世・近代期には「だろう＋はず」という承接の例はない。そして、『CD-ROM 版新潮文庫の100冊』の昭和2年（1927）以降の作品にも、助動詞「う＋はず」が39例（うち「う＋はずがない」37例）あるが、「だろう＋はず」の例はない。

ところが、現在の日本語には、「う＋はず」「だろう＋はず」両方の例がみられ、「う」「だろう」はそれぞれ異なる「はず」形式に上接している。例えば、インターネット上の検索⁵で確認した例では、「う」は本稿の要点①と同じく、「はずがない」の上接語として現れるものがほとんどであるが、「だろう」は「はずがない」の上接語として現れることは稀で、3例が確認できただけである。「だろう」が上接する「はず」形式は「はずの」が圧倒的に多く、次いで、「はずなのに」「はずが」が目につく。次に、「だろう」

が上接する「はずがない」「はずの」各2例をあげる。

- 21) 確かに、刑務所が快適な空間であっていいだろうはずはない。二度とこんな所は御免だという思いをみっちり叩き込むというのはもっともなことです。

「大石英司の代替空港」

eiji.txt-nifty.com/diary/2006/02/post_c22c.html 2006.8.2 採集

- 22) 恐らく海部総理としてもいわば一人の国民に立ち返ったときに、このままでいいだろうはずはない、こういうふうに実感としてお持ちになっておるのではないか。

「衆議院会議録情報 第116回国会 予算委員会 第4号」

kokkai.ndl.go.jp/SENTAKU/syugiin/116/0380/11610160380004c.html
2006.8.2 採集

- 23) それは米国が取るだろうはずの措置、それが引き金となって起こる結果、——おそらく、これと同様の攻撃が増えるか、あるいはそれよりさらに悪い事態になるという結果——すら考慮に入れていない。

「chomsky/bombing」

w3sa.netlaputa.com/~gitani/bushwar/chomsky-bombing.htm 2006.8.2 採集

- 24) 本地方のそのまた田舎に住んでいて、唯一不満があるとしたら本の入荷が都内よりも一日遅いものがあるということと、都内なら平積みされているだろうはずの本が数冊しか入荷されないものが多いということだ。

「雪国通信ヒトリシズカの咲く頃」

fondant.exblog.jp/i10 2006.8.2 採集

「だろう+はず」の出現は、まず、助動詞「だろう」が、終止法で推量を表す形式というこれまでの性質を脱し、「う」と同じように事態が現実ではないことを示す機能をもつようになった変化としてとらえられる。

そして、「だろう+はず」のうち、「だろう+はずの」が多数出現する理由の1つは、「はずの」が用いられる文の多くが、24)のように「現実との食い違い」(太田(2002))を表すことであると考えられる。「う」が、現実性の否定を表す「はずがない」と結びついていたように、現代語では「だろう」が「現実との食い違い」と結びついているのである。「だろう」が「はずなのに」「はずが」に上接する理由も同様である。しかし、「だろう+はずの」には、23)のように「未実現」という意味での非現実を表すものも多く、なお今後の検討が必要である。

また、「だろう+はず」には、「だろう」の用法上の制約を補うための形式という側面もある。「だろう+はずの」は「だろう」が実質的な名詞を修飾するのを避けるための表現として、「だろう+はずがない」は「だろう」の否定表現の1つとして、それぞれ有用である。

例えば、「明日受験するだろう太郎」は非文法的ではないが、規範的な表現とはいえず、そのため話し手は、「だろう」と実質的な名詞との間に、「はずの」を挿入するの

である。また、「だろう」は次に否定要素を直接続けることができず、「だろう」を用いて否定を表現するためには、「はずがない」「わけがない」「とは考えられない」など、後統部で否定を標示する必要がある。そして、「だろう＋はず」という表現の使用には、「う＋はず」という表現への連想も働いているであろう。

現代の日本語にみられる「だろう＋はず」の用例は、このようないくつかの要因が複合した結果なのではないだろうか。

6. おわりに

本稿は、近世・近代期におけるモダリティ形式「はずだ」の通時的記述の一部であるが、同時に、助動詞「う」についての記述にも及んだ。そしてさらに、現代語における助動詞「だろう」についても、簡単に触れた。「はずだ」「う」「だろう」は、これまで、それぞれ独立した形式として通時的・共時的研究の対象となってきたが、本稿では、「はず」を中心に「う」（「だろう」）をその上接語としてとらえ、通時的な視点から記述した。

本稿が行った、「はず」および上接語「う」（「だろう」）の調査・分析は、これらの語の意味用法の記述に新たな資料を提供するものと考えている。

- 注1 本稿は江戸期を近世期、明治・大正期を近代期、昭和期から現在までを現代ととらえ、各時期の言語をそれぞれ近世語、近代語、現代語として扱う。「近代語の形成・確立期」は松村（1954）、吉田（1971）、田中（2005）等により、筆者が判断したものである。
- 注2 名詞＋「だ／である」および、形容動詞に「う」が下接した「だろう」「であろう」は「う」として扱う。本稿が助動詞「だろう」として扱うのは動詞・形容動詞に下接するものである。
- 注3 『網斎先生敬斎箴講義』は成立年が不明であるため、講述者の浅見綱斎の没年を仮に成立年としてある。
- 注4 推量を表す「う」が「ある」に下接している場合が多いことは、中村（1948）の近世・近代期の意志形・推量形についての記述、原口（1973）の近世期の推量形についての記述からもうかがえる。
- 注5 Google 検索を行い、一部重複するものを含む最初の 100 件を検討した。

参考文献

- 太田陽子（2002）『「はずだ」を用いた連体修飾表現について——『安全なはずの学校』は安全か』『東京大学留学生センター紀要』12 pp.61-82
- 尾上圭介（1999）「文の構造と“主観的”意味——日本語の文の主観性をめぐって・その2」『言語』28-1 大修館書店 pp.95-105

- 佐田智明 (1974) 『『はず』と『つもり』』『北九州大学文学部紀要』10 pp.41-53
- 城田俊 (1977) 「《う／よう》の基本的意味」『国語学』110 pp.37-46
- 菅由美子 (2004) 「近世期資料にみる『はず』のモダリティ化」『日本語文法』4-2 pp.186-201
- 田中牧郎 (2005) 「言語資料としての雑誌『太陽』の考察と『太陽コーパス』の設計」『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究——『太陽コーパス』研究論文集——』国立国語研究所報告122、博文館新社 pp.1-48
- 中村通夫 (1948) 『東京語の性格』川田書房 pp.156-170
- 原口裕 (1973) 「江戸語の推量形」『静岡女子大学国文研究』6 pp.79-89
- 堀田要治 (1969) 「む(ん)——推量〈古典語〉」『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社 pp.155-165
- 松村明 (1954) 「東京語の成立と発展」『解釈と鑑賞』19-10 (『増補江戸語東京語の研究』(1998) 東京堂出版 pp.86-118 による)
- 山口堯二 (1991) 「推量体系の史的変容」『国語学』165 pp.26-37
- 山口堯二 (2002) 「『はずだ』の成立」『国語と国文学』79-11 pp.119-129
- 吉田金彦 (1971) 『現代語助動詞の史的研究』明治書院
- 劉相溶 (2000) 「形式名詞『ハズ』の意味転成——洒落本を中心に——」『専修国文』67 pp.87-104

用例出典資料 (本文登場順)

『太陽コーパス 雑誌『太陽』日本語データベース』博文館新社 (2005)、『続狂言記の研究』勉誠社 (1985)、『本居宣長全集第3巻』筑摩書房 (1969)、『山崎闇齋学派』岩波書店 (1980)、『狂言記の研究解説篇・翻字篇・索引篇』勉誠社、『西鶴集下』岩波書店 (1957)、『近松浄瑠璃集上』岩波書店 (1958)、『東海道中膝栗毛』岩波書店 (1958)、『浮世風呂』岩波書店 (1957)、『明治開化期文学集 (二)』筑摩書房 (1967)、『夏目漱石集Ⅳ』角川書店 (1974)、『歌舞伎脚本集上』岩波書店 (1960)、『盤珪禪師語録』岩波文庫 (1941)、『洒落本大成29』中央公論社 (1988)、『泉鏡花集』角川書店 (1970)、『島崎藤村集Ⅰ』角川書店 (1971)